

## 批 評

ピエトロ・オルシイ氏の

『カヴール傳』(一)を讀む

文學博士 内 田 銀 藏

今より凡そ十六七年前にピエトロ・オルシイ氏は『近代の伊太利』(一)と題する書を著はし、之を The Story of the Nations 叢書の中に入れて先づ英文で出版せしめたから、本誌の讀者の中にも其書を讀まれ、其著者の名を記憶して居らるゝ人が或はあらうと思ふ。オルシイ氏の『近代の伊太利』は尋で獨逸でも出版され、また著者の自國の語で L'Italia moderna. Storia degli ultimi 150 anni. と題して刊行された。明治三十七八年の頃、私は歐羅巴に居り、獨逸から瑞西を経て伊太利に入り、

ミラーノ及トリノで少しく伊太利再興の歴史、所謂、Storia del Risorgimento Italiano を取調べやうと試みた。Risorgimento は、佛語では resurrection やうと試みた。は renaissance に當り、英語では revival に當るであらう、今茲に紹介するオルシイ氏の『カヴール傳』には、序言の第肆頁に Revival を Risorgimento に填用して居る(三)、而してまた本文の一三頁、一四頁、一四八頁には、"the Italian Revival" と、語が用ひられて居るが、是れは、"the Italian Taliano" に當ることと思ふ。我が國語に "Risorgimento" を譯するに、復活・復興・再興等の語の中、孰れを用ふるを最も妥當とすべしか、速かに決し兼ねることであるが、私は今暫く私の伊太利滞任は至て僅かな日數であつて、其の取調は一向進まないで、忽ち中止したことであるが、其の前後私は偶々オルシイ氏の『近代の伊太利』の獨逸版と伊太利版とを手にし、其の或る部分を多大の興味を以て讀んだことである。私はオルシイ氏に遇ふことを果さなかつたけれども、一びた書信を通じて、而して同氏から同氏の他の著述『伊太利は如何にして出來たか』(四)の寄贈を受けた。歐羅巴から歸つて以來、私は約十年を夢の如くに過ごし、其の後オルシイ氏の様子をも知らずに打過ぎたが、

頃日、氏の近著に『カヴール傳』あることを知り、やがて其の書に接することを得たのは、自分の欣幸とする所である。私は其の書に接するや、右の如き由來があるから、一種特別の興味を以て之を讀んだ。而して私が今茲に此の文を草するの、上に述ぶる如き來歴があるからである。

オルシイ氏の『カヴール傳』は、デフィス氏 Davis の編する所の *Heroes of the Nations* 叢書の一編として英文で書かれ、一昨年（西曆一九一四年即ち我が大正三年）出版されたものである。序言と本文二十章とより成り、紙數はすべて約四百頁、それに多數の見事なる挿畫と二葉の歴史地圖とが附してある。挿畫の選擇には頗る意を用ひられたもの、如く、趣味あるもの、また參考に資すべきものが多い。カヴールの肖像は、都合四種、外に諷刺畫が一種添へてある（首卷、及五四頁、八四頁、一六八頁、一九六頁）。相對照して見ると頗る

興味を感ずる。カヴールが主宰でトリノーで出した新聞紙 “Il Risorgimento” は、一八四八年三月二十三日の分の寫眞版が載せてある。地圖二葉の中、佛蘭西革命以前の伊太利の圖は地名の書き方に於て、見直ちに修正を要すと思はれたものがある。最初の分、即ち

私は最初此の本を見るまでは、オルシイ氏の此の近著は、氏の舊著とは異つて、専らカヴール其の人の經歷を記述し、其の人物・性行の叙説評論に重きを措いたものであらうと想像して居つたが此の想像は十分適中しなかつた。其書を見ると題名は單に “Cavour” はなつて居らないで “Cavour and the Making of Modern Italy. 1810—1861” となつて居る。それから本文を閲讀して行くと、豫期したよりも傳記的要素が少く、一般に伊太利再興史の重要事件を叙述せる部分が多きを占めて居る。本書は嚴密なる意義でのカヴール傳と云はんよりも、寧ろカヴールを中心とした近代伊太利史である、オルシイ氏は此の書の著述に當りても、

傳記作家たるを同時に、否或は寧ろより多く國民史家の態度を採つて居らるゝやうに思はるゝのである。

著者は、本書の序言(肆頁)に於て、左の如く述べられた。

“In this Revival of Italy there emerged many splendidly patriotic figures, genuine examples of every virtue that is most admired. But three in particular excel ; the thinker and apostle, Joseph Mazzini ; the statesman, Camillo Cavour ; and the popular hero, Joseph Garibaldi, who was the highest expression of what is most generous in the Italian character. In this triumvirate, the man who knew how to discipline all the forces of the country, to coordinate them, and to lead them towards the common goal, the one who succeeded in cry-

tallising into facts the hopes of all, was Camillo Cavour, and for this reason the story of his deeds becomes quite naturally a history of the process by which Italian unity was brought about.”

著者がカヴールを以て伊太利の再興に寄與せる諸勢力を能く結合し、能く組織し、能く指導して志士をして其の宿志を遂げしめ、國民をして其の多年の希望を達せしめたる政治家なりとする見解は、本書中、尙ほ所々に見えて居る(特に三四五—三四六頁參看)〇而して著者は此の序言の文に於ては、マツチニー、ガリバルデーイ及カヴールの三人の中、特にカヴールに重きを措いて居るけれども、本文に於ては、或は二人を“the three greatest builders of that wonderful edifice” ヲ云ふ(一四頁註)〇或はマツチニーのカヴールヲ云ふ“Those whom all must regard as the two greatest builders of that

wonderful edifice, the Italian *Risorgimento*”の云ひ  
(五七頁)、また卷末、伊太利の幸運は人物の輩出  
にもよりの趣旨を説ける所に於ては、

“In reviewing the vicissitudes of the Italian  
*Risorgimento*, it is usual to say that Italy has  
been fortunate—it is usual to speak of her  
lucky star. But if one reflects upon the great  
sorrows that had to be endured in the making  
of Italy, the forces of intellect, the heroic  
deeds that were displayed, it will easily be  
recognized that Italy owes her good fortune  
to herself, to her thinkers and poets, to the  
long roll of her martyrs, to her eminent sta-  
tesmen, to her valiant soldiers. The fortune  
of Italy consists in the fact that she produced,  
during those years, a splendid company of  
elect minds and noble souls, and especially

the four personalities who furnished the most  
valuable elements in her redemption: the apo-  
stle who gave the faith, the hero who moved  
the spirit of the people, the sovereign who put  
the monarchy at the service of the revolution,  
and the statesman who co-ordinated and dis-  
ciplined all forces in order to attain the great  
end in view.” (pp. 371—372).

を述べて、マンチニー、ガリマンデー、非クト  
ル王、及カヅールの四人を併せ挙げ、敢て其の間  
に輕重を置かないのである。著者はマンチニーを  
カヴァーニを對比しては、寧ろ左の如くに論じて  
居る。

“Later in life he (Cavour) became a fierce  
opponent of Mazzini through failure to recog-  
nize the great merits of the prophet of the new  
Italy. Yet it was precisely Mazzini's idealism

which raised up those souls, full of calm, heroic faith, that were afterwards the most effective fellow-workers with Cavour in the national revival; it was that idealism which created the conditions necessary for the fulfilment of Cavour's positive policy." (p. 58).

それは兎に角著者がカヴール、マツチニー此の兩人の傾向の差異を説き、カヴールの性格を論じた文句は面白い。同じ頁、今引いた文の少し前に  
"In the one, idealism and fancy predominated; in the other, regard for facts and arguments. Cavour admitted that he had no imagination, and was incapable of inventing the simplest story to please a child. And the natural tendency of his mind had been strengthened by the mathematical studies that he pursued so sedulously at the Military Academy."

と申して居る。

カヴールはもと工兵士官であつたが、後に新聞記者になり、終に大政治家になつたのである。彼れは壯年の時、故國を去つて異郷に流寓し、佛蘭西にも英吉利にも滞在したことがある。私が今此のオルシイ氏の『カヴール傳』を讀んで殊に感じたことの一は、彼れが異郷に在りても本國を忘れず他國で如何に榮達の望があつても、之を捨て、故國の爲めに盡さんとの決心を有したことである（本書七一頁）。又私の注意を惹いたことの一は、彼れが外遊により豊富なる政治及社會上の智識を得、殊に英吉利通になつて、自由に關する英人の考に深く感服し、また瑞西及佛蘭西の雜誌等に英吉利の政治社會問題に關する論文を書いて寄せたことである（本書七二頁）。

カヴールは西曆一八一〇年八月十日を以て生れ一八六一年六月六日を以て歿した。ピスマークの

生れたのは、一八一五年四月一日であるから、カヴールはビスマルクよりも約五年の年長者であつたのである。伊太利の統一と獨逸帝國の建設とは屢相對照して考へられ、カヴールとビスマルクとはよく比較せらるゝことであるが、ルイジール・ザツタイー氏 Luigi Luzzati がカヴール生誕百年祭の折、トリノでの演説は、獨逸と伊太利との國情の異同を論じ、カヴールの境遇、遣り方、及仕遂げた功業とビスマルクの之を對照比較して説ける所、頗る聽くべきものがある。本書には三四六頁以下に之を引いて居る。

私は豫てから我が維新史は、之を獨逸帝國の建設、及伊太利再興の歴史と對照比較して研究すると、また大に思ひ當る所があらうと思惟して居つたものである。獨逸の場合と伊太利の場合とはそれ／＼頗る異なる所があるが、また一方に於ては相對比して發明すべきものがある。我が日本の國情はまた獨逸とも伊太利とも大に同じからず、我が維新史の徑路は、獨逸帝國の建設史、若しくは伊太利再興史と頗る趣を異にして居ることは、申す迄もないが、其の間に多少或る似通つた所があることは、之を認むるに難からぬであらう。私が曾て伊太利再興史に興味を持つたのも主として之を以て我が維新史の研究上、對照比較の資に供せんと欲したのに外ならぬ。私は未だカヴールを能く知らず、又我が大久保公の事歴にも精しくないが、カヴールと大久保公とを比較して其の人物・性行・經歷の異同を詳にし、兼ねて我が維新史と伊太利再興史との相對比すべき點、及それ／＼の特質を明にすることは、また一の興味あり、且つ益のある仕事であらうと思つて居つたことである。

それ／＼頗る異なる所があるが、また一方に於ては相對比して發明すべきものがある。我が日本の國

(一) Cavour and the Making of Modern Italy. 1810—1861. By Pietro Orsi, of the University of Padua.

Deputy in the Italian Parliament, New York and London, 1914.

- (11) Modern Italy. By Pietro Orsi. London, 1899, and New York, 1900.

(12) 'It is true that from Shakespeare's time to Byron's Italy seemed to be dead. The foreigner who visited the peninsula was able to neglect its people, and to devote his attention solely to its monuments of art and archaeology, and to the beauty of its scenery. The Italian people seemed dead, but it was only in a state of lethargy, and when it awoke it once more accomplished feats that are worthy of Roman valour. So there came again, in Italy's history, a glorious epoch—the one, that we speak of as her Revival (*Risorgimento*).'

- (13) Pietro Orsi, Come fu fatta l'Italia. Conferenze popolari sulla storia del nostro Risorgimento. Opera premiata dal R. Istituto Lombardo di Scienze e Lettere. Seconda edizione. Torino—Roma, 1905.

## 岐阜縣產業史 神谷保朗編

大正五年三月發行(菊版二〇八頁)

本書は岐阜縣が神谷保朗氏に囑託して、同縣の三大工業と稱する織物陶磁器製紙の起源沿革を調査編纂せしめたるもの、製陶・製紙・機業の三編に分ち毎編首めに我國一般の變遷を叙して、後同縣に及ぼし、更に各主要産地の各説に移る。大體に於て編纂の體を得たりと謂ふべし。加之此種の史料の概して、闕乏を告ぐる間に、如上の記述をなせる著者の努力はこれを多とせざるべからず。本書は以上三業の歴史的概念を讀者に與へて、其共に古代より繼續せる祖先の遺業なること、特に近世に於ては彼等が官憲の壓迫や特權の專制の下に苦心經營相當の發達を續けて今日の隆運を招くに至りしことを理會せしむ。若しこれに依つて何程か地方人士を啓發し、斯業の向上發展に資するを得ば、本書編纂の目的は略達成せられたるなり。而